

鎌倉矩子, 岩崎清隆 (インタビュー・編)

## 作業療法を創る —この50年のナデシコ・サムライたちの挑戦

杉原 素子

(新宿けやき園, 施設長  
国際医療福祉大学大学院, 教授)



「理学療法士及び作業療法士法」の制定(1965年)から50年を迎える2015年, 11人の作業療法士との対談を通して, 日本の作業療法の姿をとらえるのが本書のねらいである。11人の人たちは, 現時点で教育に携わる人もいるが, 編者の意図する「臨床の仕事をしてきた人」にくられる人たちである。インタビュー兼編者の鎌倉矩子, 岩崎清隆両氏が積極的に対談に加わっていることから, この50年をどのようにとらえていこうとしているかについてのかれらの思いに十分触れることができる。

本書を読み, まず登場する人たちの作業療法士としての立ち位置の盤石さに感動する。ある人は黙々と謙虚な貢献の姿を伝え, またある人は華やかな人目を引く貢献の姿を伝えてくれている。

本書でナデシコ・サムライと呼ばれ, 登場する魅力あふれる作業療法士たちは, 澤 治子氏, 辰巳三代子氏, 古川 宏氏, 山根 寛氏, 種村留美氏, 藤原 茂氏, 辛島千恵子氏, 小川敬之氏, 田中順子氏, 目良幸子氏, 石井晴美氏である。年齢は80~50代, 作業療法士としてのキャリアは, 日本にまだ

作業療法士がいなかった時代から作業療法を模索してきた人, 他の分野から作業療法士に入り込んだ資格取得年数が若い人など, 50~20年である。

かれらは, これまでの編者とのつき合いを通して選ばれた人たちであることから, 一人ひとりが何を感じ, 何を考え, どのようにして今日に至ったかを, 対談を通してわかりやすく, 読者の心に染みこませてくれる。編者の言葉によれば, かれらは目の前の患者のために役立ちたいと願い, そのために自分が何をしてきたかを明確に語る陽性思考と実行力を備えた人たちであり, このことからかれらの語りを通して作業療法士・作業療法の有用性を容易に感じ取ることができる。

かれらは, 作業療法のイメージを低めていると巷で語られている介入手段の「作業」について, 医療サービスの場においても, 種々の作業を必要に応じて楽しげに駆使し, 患者ニーズに合わせて自由に作業やADLを使い分けてきたことがうかがえる。

医師や多数の理学療法士に囲まれた医学モデルの枠内では, 作業療法の問題の所在や医師の処方内

容がどうしても身体運動的なものになるのはやむを得ないことではあるが, それでも作業療法士が応用性あるいは全体性(holistic)の回復を目指す専門職であると淡々と語るかれらのような作業療法士が多くいてほしい。

巻末に「インタビューを終えて」と題して編者2人の対談が添えてある。そこでは, 作業療法士をより強くするための示唆として, 事例報告を残すこと, 書き方を修練すること, 学問的な深みを増すということ, 今後もっと光を当てたいこと等が語られている。学問的な深みの箇所では語られている直観を科学する方法としてのクリニカル・リーズニング, もっと光を当てたい分野としての間主観性等は, 事例報告や書き方の修練と合わせて養成教育の有り様と大きく, 重く関係するとの感慨を抱いた。

本書は, 作業療法士である私たちに, 自分たちの存在に肯定感を与えてくれるとともに, 解決すべきこれからの課題を具体的にとらえることができる良書である。

四六判 488頁 3,600円+税  
青海社 刊  
☎ 03-5832-6171